

原著：秋田大学医短紀要10(1)：56-61, 2002

本学における「精神障害者の社会復帰」に関する教育の展望  
—在宅看護実習において精神科訪問看護を実施した学生の実習記録の分析から—

工 藤 由 紀 子      煙 山 晶 子      宮 越 不 二 子

## 要 旨

本学の看護基礎教育における「精神障害者の社会復帰」に関する教育の問題点を明確にし、よりよい教授方略を模索していくために、今回我々は在宅看護実習における学生の実習記録の内容を分析し、精神科訪問看護における学生の学びの状況を把握する目的で調査を行った。

その結果、精神科訪問看護を実施した学生の実習記録から、【1. 訪問看護の役割と必要性】、【2. 患者と家族への関心】、【3. 精神科看護技術】、【4. 看護婦として求められる資質】の4つのカテゴリが得られた。

学生に対しては、社会復帰を支援するためのサポートシステムの重要性和連携の大切さを、今後さらに強調していく必要性が示唆された。また、実習においては学生のありのままの感情を意識化させ、表現させるような関わりかたをしていくこと、また、講義等でその機会を設けていくことが重要である。

## はじめに

平成11年の精神保健福祉法の改訂では、精神障害者の福祉と社会復帰および社会経済活動への参加の促進が提唱された<sup>1)</sup>。これにより精神障害者が社会復帰することへの必要性がさらに高まり、病状の固定した長期入院患者に対する積極的な退院の促進や、新たな入院患者の早期社会参加を促す働きかけが多くの入院施設で進められている。そのような背景の中で、患者が安定度の高い状態を保つためのサポートシステムとしての精神科訪問看護が注目されており、

その取り組みについての報告も多くなりつつある<sup>2)3)</sup>。

精神障害者の社会復帰は、時代の背景とも合わせると重要な教育項目の一つとなっており、本学の看護基礎教育の面においても、時代の背景に合わせた指導方法を見出し、今後さらに発展させていく必要があると考えている。

そこで、本学の看護基礎教育における「精神障害者の社会復帰」に関する教育の問題点を明確にし、よりよい教授方略を模索していくために、今回我々は在宅看護実習における学生の実習記録の内容を分析し、精神科訪問看護におけ

---

秋田大学医療技術短期大学部  
看護学科

Key Words: 精神科訪問看護,  
学生,  
社会復帰

る学生の学びの状況を把握する目的で調査を行った。

## 定義

### 精神科訪問看護

地域で生活している精神障害者および入院患者の退院に先立って、住居や通所施設、職場などのケースの実情に応じて多様な場へ看護師、保健師などが訪問し、療養生活や社会生活上の相談・援助を行うことをいう<sup>4)</sup>。

## 対象

平成11年度、12年度に在宅看護実習を行った本学の看護学科学学生149名のうち、精神科訪問看護を実施した学生の記録を対象とした。

「精神臨床看護」は2年次1単位(30時間)が設けられており、その時間の中で精神障害者の社会復帰について教授されていた。

また、平成9年のカリキュラム改正に伴い、本学では平成11年から3年次45時間(1単位)の在宅看護実習を実施している。実習場所は本学より通学可能な6ヶ所の訪問看護ステーションであり、各1～2名ずつの学生を配置している。精神病の既往のある方への訪問看護も実施しているのは、6ヶ所のステーションのうち1ヶ所である。

## 方法

学生には、在宅看護実習に先立ちオリエンテーションを実施した。在宅看護実習の目標を念頭に置き、実習で実際の看護を見学したり、看護師と共に援助に参加した体験を、実習記録として記載するように求めた。さらに、これらの実習記録をもとに、内容を分析すること、その結果を個人が特定できないように配慮したうえで公表することについて、口頭で説明し、学生からの了承を得た。

自由記述形式で記載された学生の実習記録から、患者の年齢、性別、疾患名、家族背景、症

状、治療、看護方針、生活状況を研究者間で抽出した。

自由記述の内容の分析方法は、対象とした文全体を記述内容が単一要素であるようにセンテンスを区切り、それを1件とした。さらに、記述内容の類似性に基づきカテゴリ化した。分析については、研究者間で検討し、妥当性の確保に努めた。

## 結果

精神科訪問看護を実施した学生は、149名中9名(平成11年度4名、12年度5名)であった(6.0%)。

### 1. 患者の背景

訪問看護の対象となった患者は、実数で22名であった。男性は9名(40.9%)女性は12名(54.6%)であり、記録からは読み取れない患者が1名(4.5%)であった。家族的背景としては、独居が9名(40.9%)、家族または知人との同居が9名(40.9%)不明が4名(18.2%)であった(表1)。その他の背景に関しては、倫理的配慮の面から省略する。

### 2. 自由記述の内容

精神科訪問看護に関する自由記述の内容を分析した結果、35件が抽出された。一人当たりの平均は約3.9件であった。抽出された35件のうち、分析不能な3件を除いた32件をカテゴリ化した。その結果、4つのカテゴリが得られた。それらの内容と頻度は、【1. 訪問看護の役割と必要性(8件, 25.0%)】、【2. 患者と家族への関心(6件, 18.8%)】、【3. 精神科看護

表1 患者の背景

		n=22 単位:人(%)
		計
性別	男	9(40.9)
	女	12(54.6)
	不明	1(4.5)
家族的背景	独居	9(40.9)
	同居	9(40.9)
	不明	4(18.2)

技術（9件, 28.1%）, 【4. 看護婦として求められる資質（9件, 28.1%）】であった（表2）。

各カテゴリの記述内容は、以下の通りであった。

【1. 訪問看護の役割と必要性】は、8件（25.0%）であり、これは、生活環境の調整や家族間の調整などに関する記述であった。このカテゴリはさらに2つの内容に分類できた。分類した各々の内容は、【a. 役割】、【b. 必要性】であった。これらのうち一番多く記述された内容は【a. 役割】であり、5件（15.6%）の記述があった。その具体的内容は、「家族との調整役」「デイケアに参加を促す」などであった。また、【b. 必要性】は3件（9.4%）の記述があった。その具体的内容は、「来客ではしゃぐ子を叩く患者を見て、この様な状態にある人への訪問看護の必要性を感じた」「社会復帰の援助として活かされている」などであった。

【2. 患者・家族への関心】は、6件（18.8%）であり、これは、患者や家族に対する観察や、表情・言動などへの解釈に関する記述であった。その具体的内容は、「家族の疾患への理解度」「話す時視線を合わさないと感じた」などであった。

【3. 精神科看護技術】は、9件（28.1%）であり、これは、訪問看護の際に行われた看護技術に関する記述であった。このカテゴリはさらに3つの内容に分類できた。分類した各々の内容は、【a. 具体的な援助】【b. 効果的な援助】【c. 特徴的な援助】であった。これらのうち一番多く記述された内容は、【b. 効果的な援助】であり、4件（12.5%）の記述があった。その具体的内容は、「やる気を促す、一緒に行く」「駄目な事より、やってもいいことを助言する方が受け入れやすい」などであった。次いで記述件数の多かったものは、【a. 具体的な援助】で、3件（9.4%）の記述があった。その具体的内容は、「確認行為への対応」「清潔行為に関心がないため促しが必要」などであった。

また、【c. 特徴的な援助】は2件（6.2%）の記述があった。その具体的内容は、「処置ではなくコミュニケーションを主とする」「コミュニケーションをとるのが大切なことの一つ」であった。

【4. 看護婦として求められる資質】は、9件（28.1%）であり、これは、自分の内面や今後の課題に関する記述であった。このカテゴリはさらに2つの内容に分類できた。分類した各々の内容は、【a. 内面への関心】、【b. 学生自身

表2 学生の感想

総記述数(32件:100%)		
大項目(記述件数:%)	小項目(記述件数:%)	主な記述内容
1.訪問看護の役割と必要性 (8件:25.0%)	a.訪問看護の役割 (5件:15.6%)	家族との調整役 デイケアに参加を促す
	b.訪問看護の必要性 (3件:9.4%)	来客ではしゃぐ子を叩く患者を見て、この様な状態にある人への訪問看護の必要性を感じた 社会復帰の援助として活かされている
2.患者と家族への関心 (6件:18.8%)	患者と家族への関心 (6件:18.8%)	家族の疾患への理解度 話す時視線を合わさないと感じた
3.精神科看護技術 (9件:28.1%)	a.具体的な援助 (3件:9.4%)	確認行為への対応 清潔行為に関心がないため促しが必要
	b.効果的な援助 (4件:12.5%)	やる気を促す、一緒に行く 駄目な事よりやってもいいことを助言する方が受け入れやすい
	c.特徴的な援助 (2件:6.2%)	処置ではなくコミュニケーションを主とする コミュニケーションをとるのが大切なことの一つ
4.看護婦として求められる資質 (9件:28.1%)	a.内面への関心 (4件:12.5%)	特に精神病の方への接し方は、何が起るかわからないという考えが頭から離れず 訪問看護婦も親身になればなるほど苛ただしさが募るのだから
	b.学生自身の課題 (5件:15.6%)	訪問看護婦の姿勢としての課題 緊急時の判断を求められる

の課題】であった。これらのうち一番多く記述された内容は【b. 学生自身の課題】であり、5件（15.6%）の記述があった。その具体的内容は、「訪問看護婦の姿勢としての課題」「緊急時の判断を求められる」などであった。また、【a. 内面への関心】は4件（12.5%）の記述があった。その具体的内容は、「特に精神病の方への接し方は、何が起るかわからないという考えが頭から離れず・・・」「訪問看護婦も親身になればなるほど苛ただしさが募るのだろう」などであった。

## 考 察

現在、本学の「精神臨床看護」では、精神障害者の社会復帰の必要性やその看護について、「精神障害者の社会復帰の必要性が理解できる」「精神障害者の社会復帰の形態が理解できる」「精神障害者の社会復帰に必要な看護を理解できる」を目標として、症例を提示しながら講義を行っている。在宅看護実習においては、訪問対象者を特に限定することはせず、まず訪問看護という場に参加し、看護者と共に援助した体験などを通して学びを深めるように指導している。今回、在宅看護実習における学生の実習記録の内容を分析し、精神科訪問看護における学生の学びの状況を把握する目的で調査を行った。その結果、4つのカテゴリが得られた。

【1. 訪問看護の役割と必要性】では主に、患者および家族間の生活環境の調整や、様々な状況に置かれている患者への訪問看護の必要性について述べられていた。これは、精神科訪問看護の対象者のうち、5割の患者が家族と同居している背景もあったこと、また一方で、独居者の場合の調整について必要性を感じたためではないかと考えられた。在宅看護実習が学生にもたらすものとして、柴田<sup>5)</sup>は、「病院の実習だけではなかなか社会的側面まで目が向かないが、在宅実習が終わった後の病院実習では、社会的側面のとらえ方がそれまでとは明らかに違ってくる」と述べている。本研究においても、学生

は実習の場で体験したことを通して、患者の社会的側面を考えることができ、精神障害者に対する訪問看護の必要性を感じ、社会復帰の援助として訪問看護が活かされていることを実感していたことが明らかとなった。

一方で、学生の実習記録の中には、訪問看護ステーション内の他スタッフや他職種・かかりつけ医との連携や情報交換に関する記述がほとんど見られなかった。これは、人・施設間の連携や情報交換などが、実習中に体験できる機会の少ない項目であるためではないかと考えられた。現在、精神障害者の社会復帰をとりまく地域精神医療資源には、精神科訪問看護の他に精神科デイケア、精神科救急医療、生活訓練施設などの居住資源、授産施設などの社会経済活動資源など多岐にわたっている。このため、各施設やスタッフとの連携をはかり、情報交換をしていくことは重要であると言える。したがって、社会復帰を支援するためのサポートシステムの重要性や、スタッフ間の連携の大切さを、講義やカンファレンスを通してさらに強調していく必要があると考えられた。

【3. 精神科看護技術】は、訪問看護の際に行われた看護技術に関する記述であった。精神科看護技術とは、精神科看護の領域における根拠に基づいた看護技術のことである<sup>6)</sup>。このカテゴリでは、精神科看護技術の特徴的なものとしてコミュニケーションがあげられていた。精神科訪問看護は、患者と看護者のコミュニケーションの上に成り立つと言われている<sup>2)</sup>。学生は実習を通して、コミュニケーションを精神科看護技術として有効に活用していることを実感できていることが分かった。また、訪問看護婦の患者に対する接し方を実際に見ることで、「駄目な事より、やってもいいことを助言する方が受け入れやすい」などの具体的な生活指導の方法やセルフケアを高めるような援助方法を見出していると考えられた。

【2. 患者と家族への関心】では、患者や家族に対する観察や、表情・言動などへの解釈に関する記述が多かった。また、【4. 看護婦として求められる資質】に関しては、学生自身の内

面や課題、訪問看護婦の内面への関心が記述されていた。その中には、「特に精神病の方への接し方は、何が起こるか分からないという考えが頭から離れず・・・」のように、予測不可能な事態への緊張感を挙げている記述もあった。訪問看護は、患者の生活の場に出向いて看護を展開していくものであるが、「訪問」という形式に不慣れな学生はその場にいるだけで緊張するものである。それに加えて、精神障害者への対応の仕方で困惑することで、精神看護を実践することもままならない時を過ごしてしまいかねない。このような「困った」場面に遭遇した場合、学生は自己の困惑した感情を見つめるよりも対応方法に関心を向け、その場を精一杯対処しようとする傾向があると言われている<sup>7)</sup>。本研究においても、学生自身の感情をそのまま表現した記述は少なく、逆に訪問看護婦の内面への関心を示してみたり、困難なことが自身の今後の課題として表現されている内容が多かった。このような場合に重要なことは、まず学生にその時のありのままの感情を意識化させ、表現することであるとされている<sup>8)</sup>。したがって、学生の患者への緊張感に対しては、カンファレンスや振り返りなどの機会の中で、学生がそのありのままの感情を意識化させ、表現させるような関わりが必要であると考えられた。また一方で、ごく少数ではあるが、「何をやればいいのか、何と声をかければいいのか分からない」などの、実習中の戸惑った気持ちをそのまま記述している学生がいた。このような状況においては、何をするのが看護なのかを指導者側から学生に示し、学生の学びの方向性を明らかにする必要があるとされている<sup>9)</sup>。このため、カンファレンスの中で学生の悩みや、患者の対応に戸惑ったことなどを明確化し、解決できるような指導をしていく必要があると考えられた。今回得られた結果を参考にしながら、学生が自己を表現することのできる場を講義の中に設けていきたいと考える。

精神科訪問看護や精神科デイケアの見学・各施設訪問は、患者本人の受け入れを考慮しなければならないこと、また実習施設の確保の難し

さや実習病院の機能上などの問題から、すべてを実現するには限界がある。このため、精神科訪問看護や地域保健における精神保健福祉対策の領域に参加して体験した学びを学生同士で共有でき、またその知識が統合できるような機会を設けるように考えていきたい。

## 結 論

1. 精神科訪問看護を実施した学生は、149名中9名（平成11年度4名、12年度5名）であった（6.0%）。
2. 在宅看護実習後の記録から学生の感想を分析した結果、【1. 訪問看護の役割と必要性】、【2. 患者と家族への関心】、【3. 精神科看護技術】、【4. 看護婦として求められる資質】の4つのカテゴリが得られた。
3. 【精神科看護技術】、【看護婦として求められる資質】の2つが最も記述数が多かった。
4. 社会復帰を支援するためのサポートシステムの重要性とその連携の大切さを、今後さらに強調していく必要性が示唆された。
5. 患者への緊張感に対しては、カンファレンスなどの機会を設け、学生のありのままの感情を意識化させ、表現させるような関わりかたをしていくことが重要である。

## 文 献

- 1) 厚生省大臣官房障害保健福祉部精神保健福祉研究会監修（2000）我が国の精神保健福祉（精神保健福祉ハンドブック・平成12年度版）．厚健出版：36-38
- 2) 重松豊美, 岡崎明子, 竹本亜由美, 他（1998）精神科における訪問看護の特性とその構造の分析．日本精神科看護学会誌41（1）：626-628
- 3) 藤本百代, 馬場史津, 加藤由美子, 他（2000）慢性精神分裂病の訪問看護とは何かその本質と意義について．社会精神医学研究所紀要28（1）：41-46
- 4) 川野雅資編集（2000）精神看護学Ⅱ 精神

- 臨床看護学. 廣川書店：178
- 5) 皆川恵美子, 柴田博美, 新倉和子, 磯田信子 (2001) 在宅看護論臨地実習の現状と課題－特集1 実りある臨地実習を目指して. 訪問看護と介護 6 (8): 617-627
- 6) 川野雅資編集 (2001) 精神科看護技術の展開. 中央法規：1- 7
- 7) 三原亜矢巳, 多喜田恵子 (2001) 学生が困った場面を振り返ることの学習効果－精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より－. 名古屋市立大学看護学部紀要 1：63-71
- 8) 田中美恵子 (2001) 精神看護学 学生－患者のストーリーで綴る実習展開. 医学書院：52
- 9) 鈴木啓子 (2001) 実習における学生への支援. 精神科看護 28(3)：58-62

An Overview of the Nursing Foundation Course  
 "Social Rehabilitation of Mentally Handicapped Patients"  
 – Analysis of Students' Records of Psychiatry Visiting Nursing  
 as part of Home Health Visit Practicals –

Yukiko KUDOH Shoko KEMUYAMA Fujiko MIYAKOSHI

Department of Nursing, College of Allied Medical Science, Akita University

In order to bring to light problems involved in teaching the nursing foundation course "Social Rehabilitation of Mentally Handicapped Patients" and to explore strategies for the improvement of instruction, we analysed the records of students participating in home health visit practicals, and conducted a survey to understand the situation of students' studies in psychiatry visiting nursing.

Four categories could be obtained from students' notes: 1. role and necessity of home-visit nursing care, 2. concern for patient and patient's family, 3. psychiatry nursing skills, 4. qualities required of a nurse.

We showed the importance of a support system to aid rehabilitation and the necessity of emphasizing the importance of cooperation. Enabling students to express their feelings frankly and providing opportunities for this in lectures is also important.